

所 陵

ISSN-0913-1906

No. 49

関西大学博物館彙報
平成16年 9月30日発行

[SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



五彩花鳥「寿」字文鉢 Chinese Bowl

目次

歴史人口学で探る幕末京都町人の生活	2
「西域への道」展観図録と海獣葡萄鏡	4
博物館コレクションにみる北野恒富旧蔵資料	6
門松の思い出	8
人間国宝北村昭斎先生と学生との対話	11
平成15年度購入資料の紹介—中国陶磁器—	13
「なんでも相談会」報告	15

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel 06-6368-1171 (直通) FAX 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

歴史人口学で探る幕末京都町人の生活

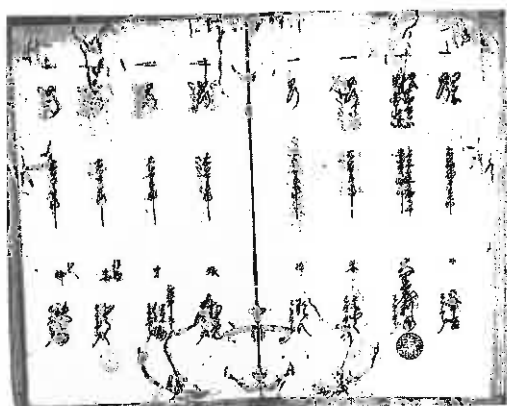
浜 野 潔

京都を訪れる観光客が今年は非常に多いと聞く。その原動力の一つは、香取慎吾が近藤勇を演ずる NHK 大河ドラマ『新選組!』らしい。京都は戦災に遭わなかったお陰で町の構造が基本的に江戸時代のままであり、当時の建物も少なからず残っている。地図を片手に歩けば、新選組の活躍した場所をそのままたどることができる。これは、江戸（東京）や、大坂（大阪）ではほとんど期待できないことであり、京都が歴史の町として多くの人を魅了する理由でもある。

京都に残る江戸時代は、町並みや建物に限らない。一般の目に触れることはほとんどないが、旧家には膨大な古文書が今なお伝えられており、歴史史料の宝庫でもある。私の専攻は近世日本の歴史人口学という分野であり、主に「宗門（人別）改帳」とよばれる今日の戸籍や住民票に相当する史料を使って、人口・家族・労働などの歴史を研究している。これまで全国各地をこの史料を求めて歩いてきたが、京都には宗門改帳を含む数多くの近世文書が残されており、都市の歴史人口学を研究する最適の場所と確信するにいった（まとまった複写資料が「京都市歴史資料館」で公開されていることは特筆できよう）。

現在、いくつかの町の史料を平行して分析が続いているが、その中の一つに花車町というところがある。旧市内の北西部、千本通と今出川通の交差点を少し上がったところであり、ここから東側一帯が西陣とよばれる一角である。いうまでもなく西陣は江戸時代の日本で、もっとも有名な織物生産地であった。今でも裏通りに入ると機織の音が聞こえてくるが、江戸時代の花車町は表通りもふくめてびっしりと機屋がならぶ町だった。1850年頃の史料によればこの町には約60軒の家があり、その中の8割ほどが織物業に従事していたことが判明する。

花車町では1819年（文政2）から1868年（明治元）まで50年間の内、36年分の宗門改帳が残されている。この史料に記載されたデータをコ



花車町宗門人別改帳（1857年〔安政4〕）

ンピュータに入力して分析すると、江戸時代の京都西陣で暮らす人びとの生活を鮮明に描き出すことが可能となる。まず家族について見ると、平均世帯規模は3～4人と比較的小さい。要するに夫婦と子供数人からなる世帯が典型的な家であり、さらに単身世帯も比較的多かった。こうした世帯の半数は手間織・糸繰などの下請職であったが、花車町にはほんの数人しか住まなかった者が圧倒的である。彼らの多くは借家住まいであり、頻繁に家を替わった。家財道具も少ない当時は、引越といってもそれほど手間はかからない。職が変わったり、あるいは家族が増えたりして家が手狭になれば、すぐに新しい場所に移ったのである。

もっとも、数は少ないがこの町にずっと住んでいる家もあった。たとえば、大黒屋伊助家は、史料のカバーする50年間ずっと花車町に住んでいた4世帯の一つである。嘉永年間の史料によると、この家の商売は「生高機 縹子織渡世」であり、絹織物のための高機を備え高級品である縹子織を専門にする機屋であった。大黒屋は、1803年（享和3）に商売を始めたと記載されているが、これは当主伊助が41歳の時であった（年齢は当時の習慣に従い、すべて数え年表記である）。この家の世帯規模はかなり大きく、7人から17人の間にある。もちろん、この

中には奉公人が多数含まれていた。たとえば史料の始まる1819年（文政2）の世帯構成を見ると、戸主、妻、男子、女子の4人家族のほかに、下男3人、下女2人が雇われており、全部で9人が暮らしていた。伊助の仕事がうまくいっていたことは、奉公人の数が少しずつ増えていることから想像できる。彼は、1830（天保元）年68歳で隠居して息子の利助に家督を譲り浄雲と改名したが、その後も長生きして1846年（弘化3）84歳で没した。彼は間違いなく成功者であったといえるだろう。

しかし、花車町の生活も楽なことばかりではなかった。この町の人口は、観察できる50年間のうち、2度の大きな落ち込みを経験している。最初の落ち込みは、1836年から1837年（天保7～8）にかけてであり、世にいう「天保の飢饉」が襲ったのである。この1年間に花車町では人口が32%も減少した。当時の史料には「西陣諸織物捌けず。前代未聞の事にて、いか程下値にても買取くれ申さず。これにより、休機同前なり」と書かれており、西陣が未曾有の不景気となったことが明らかである。

天保の飢饉は、冷害や大風雨といった自然災害によるものであり、東北を中心とした北日本に大きな打撃を与えた。しかし、人口変動を見ると西日本でも、とりわけ都市部で大きな減少があったことが判明する。花車町の史料を見ると1836年の「難波人取調書控」という史料が興味を引く。この史料は町内で施米を受けた30世帯について戸主名を記したものであるが、特に施米を2倍受け取った15世帯については、その職業、世帯員の名前と年齢、さらに難波の理由まで記されていて、世帯の様子を具体的に知ることができる。それによれば、9割近い世帯が「商売が暇」であることを難波の理由にしており、経済的理由が大きかったことが明らかとなる。さらに注目されるのは、病人がいるとした世帯が3割ほど含まれること、また、男性世帯主の死亡のためか女性が戸主となった世帯が6割にも達していたことである。この記録は天保危機が単なる凶作ではなく、何らかの伝染病による死亡危機だったという最近の学説と符合する。

花車町がこの期間に経験した2度目の人口減少は、1858年（安政5）から1861年（文久元）

の3年間であり、人口はこの間31%も減少した。この原因は、1858年の日米修好通商条約締結を受け、翌年6月に横浜・長崎・箱館の三港が開かれ自由貿易が始まったことである。同年10月には早くも西陣に深刻な影響があらわれた。西陣織にとってもっとも大切な材料である生糸が横浜で大量に買い付けられたため値段が高騰し、しかも国内市場に回る品物が不足状態となったからである。

人口減少の理由は二つあった。一つは開港の年からすぐにはじまった世帯の減少である。借家層を中心に転出するものが転入を大きく上回り、3年間で世帯数は24%の減少となった。もう一つは奉公人の減少である。こちらは、契約があらかじめ年季で決まっていたためか、減少は1年遅れて開港の翌年から始まる。1859年に49人いた奉公人は2年後の1861年には30人に減ってしまった。減少率は39%と世帯の減少率を大きく上回るペースである。その後も奉公人の減少傾向は続き、1868年（明治元）にはわずか10人にまで減ってしまった。先述した大黒屋伊助家はすでに長男利助の代になっていたが、1859年に9人いた奉公人を1860年には7人、1861年には6人に、そして1868年には5人にまで減らしたのである。

このように、宗門改帳が教えてくれる情報はきわめて豊富であり、幕末の京都に生きた人びとの生き方を鮮やかに描いてくれる。彼らは、新選組のように歴史の表舞台に登場することはなかった。しかし、こうした一般の町人も物価高騰、伝染病、経済不況といった危機を乗り越えて、したたかに生きてきたことを史料から読み取ることが可能である。京都の歴史人口学は、このように都市史研究の新しい地平を切り拓く可能性を秘めた分野なのである。

【関連論考】

浜野潔（2003）「水と町衆が生み出す暮らしの勢い」『水の文化』第14号（<http://www.mizu.gr.jp/>）

浜野潔（2003）「近世都市の経済危機と人口—京都西陣の事例から—」『関西大学経済学部論集』第53巻 第3号

「西域への道」展観図録と海獣葡萄鏡

勝 部 明 生

平成14年秋、大阪府立近つ飛鳥博物館で100年前の大谷探検隊の調査成果とその足跡を見直す「西域への道」特別展が開催された。展示品の中には、この機会にぜひ見たい資料や館長の大庭脩先生に直に教えて頂きたい史料もあり、会期中に博物館を訪ねたいと思いながら遂に果たすことができなかった。ところがそれから間もなく、先生の訃報を知り驚きと無念さで「どうしてあの時お会いしなかったのか」悔やまれてならない。約束していたわけではないのだが、なぜか今でも先生に申し訳ないことをしたような気持ちでいっぱいである。

大谷探検隊将来品のなかに、トルファンのアスターナ・カラホージャ古墓群出土の反古紙で作った死者に副えた「ミイラの履物」と呼ばれる沓がある。これについて、なぜ紙を使っているのか。その沓の底裏だけを黒く墨で塗りつぶしているのはなぜか。

また、同じ古墓群から見つかった書き付け「劉弘妃随葬衣物疏」に「建元廿二年正月癸卯朔廿二日甲子。大女劉弘妃。隨身衣裳雜物。人不得名。時見。左青龍右白虎。書手券疏。紀季時知。」とあり、青龍と白虎が「時見」（証人）として登場するのはどうゆう意味か。なお「左青龍・右白虎」の左右の使い方はこれでいいのだろうか。

さらに1975年春、新疆博物館考古隊が発掘調査したカラホージャの4・5世紀墓から出土の木製鳩杖（杖の握りの部分が鳩の形）の鳩が口に錦の裂を銜えているのは何を表しているのだろうか。等々、教えて頂きたいことがたくさんあったのに誠に残念。惜しい先生を亡くしてしまった。

それで、担当の「文化財学概論」の授業を急きょ「大庭脩先生を悼む」に変え、先生の立派な研究業績やご指導受けたことなどの追悼講話の時間を持った。大谷文書中、有名なアスターナの「張懷寂告身」が先生の学生時代は、糊がはなれてばらばらの断片であったが、当時院生だった先生の調査によって文書がつながること

が明らかになり、ご自身で見事に復元された。これは長寿2年（693）、張懷寂に与えられた告身（任官命令文書）で現存最古のものである。告身文書研究で先生はその後「唐代告身の古文書学的研究」という大論文を著され、たまたま出版された昭和35年4月から関西大学へ奉職されることとなり、森鹿三先生から就職論文とひやかされたことなどを話されていた。

「告身」に関連した史料のことでは、小生が勤務することになった大阪市立博物館（現：大阪歴史博物館）は先生に大変お世話になったことがある。博物館開館直前、購入予定資料の目玉品は「明王贈豊太閤冊封文」（豊臣秀吉を日本国王に封ずる明の詔命）で、この史料は頼山陽の『日本外史』以後、「秀吉は怒って破り捨てた」という俗説が流布していた。大庭先生に鑑定して貰い評価が定まり、第1号購入館藏品となった。

今回、「西域への道」特別展会場へは行けなかったが、同展の図録には出品物の図版解説・大谷探検隊の記録写真、探検隊の足跡などに加えて大庭先生の執筆「西域文化研究会のことなど」が掲載されており、楽しくページをめくっていくうち、図版写真21で手が止まってしまった。白銅製海獣葡萄鏡（〈21.2センチ〉近つ飛鳥博物館蔵）は小生分類の棚型帯圈式の典型的なもの。少し緑錆に覆われているが、精鏡である。初めて目にするもので、多分、これまで余り知られていないのではないかと思い調べてみた。形式と面径から、同型鏡或はそれに近いもので次の3面があることがわかる。①藤井有鄰館鏡（21.5センチ）②洛陽花子砦出土鏡（20.8センチ）③湖南省出土鏡（20.2センチ）で、このうち③は、面径が約1センチ小さいので同型鏡と即断できないが、①、②は同型鏡と見てよいだろう。この鏡形式の特徴は、内外区を分ける凸界圈の外周の帯圈が低い棚状の高まりとして残り（帯圈式鏡の変形）、その上面に葡萄の房と柏葉をセットにして傘形に開いた葡萄文を規則的に配置した精美な文様帯をもつ。

内区主文は、伏獣鈕の回りに4獫狫・2龍・3小獸（獫狫）・3小禽が加わる。鏡径に比べて動物文が多く、龍は体部に鱗状の表現、獫狫は背骨や肋骨が鮮明に描かれている。獫狫の中には仰臥して腹部を上にしたユーモラスに姿態を見せるものもある。

外区主文は8禽8獫狫。禽と獫狫は交互に一つずつ配列され、獫狫は内区同様に地に伏して上方を見上げている。禽は俯瞰視の飛翔形と側面視の栖息形で表され、鳥文の中には水鳥も含まれている。禽獣は8波状連結の葡萄唐草文の内・外行波の中に納まるように配置されている。外縁帯には雲花文が交互に反転しながら、連続してめぐっている。

さて棚型帶圈式海獸葡萄鏡は、この1面を加えることにより、都合6組18面の同型鏡を数えることになった（付表参照）。前式の帶圈式海獸葡萄鏡にはほとんど同型鏡が無く、僅か正倉院9号鏡と香取神宮鏡の1組（29.7センチ）が知られていた。棚型帶圈式になって同型鏡が多数作られるようになったのは、帶圈式など大型海獸葡萄鏡の同型鏡製作が技術的に極めて困難であったのと、この頃から海獸葡萄鏡が広く普及するようになったからであろう。それら棚型帶圈式の同型鏡の中に土中からの出土鏡が4面含まれ、幅広い使用の様相を表している。次の定型式鏡ではそのような傾向が一段と強くなり、定型式六獣形は8組29面（17.7～12.8センチ）の同型鏡の中には高松塚古墳、西安市独孤思貞墓、同十里鋪337号墓、同韓森寨401号墓などへの副葬品としても扱われている。続いて定型式五獣形・四獣形へと一層小型化し、古墳・祭祀遺跡などへの使用も多くなる。

このように同型棚型帶圈式鏡は、大型鏡から中・小型鏡への過度期に当たり、海獸葡萄鏡の普及と量産化の先駆けとして位置付けられよう。なお、この鏡式の4面の出土鏡は遺跡の性格を明らかにしなかったが、今後は古墳墓などの遺跡から出土する可能性が充分にあることを推察させる。

2004年7月30日

大庭脩先生を偲んで



白銅製海獸葡萄鏡 唐



張懷寂告身 7世紀 アスターナ出土

付表：帶圈式・棚型帶圈式海獸葡萄鏡同型鏡

帶圈式海獸葡萄鏡	① 正倉院 9号 (29.7cm)
	香取神社 (29.7cm)
棚型帶圈式海獸葡萄鏡（十字形唐草）	① 洛陽油王村出土 (24.2cm)
	梁上椿氏 (23.5cm)
	個人 (23.25cm)
（三ツ又唐草）	① 高野山北室院 (22.3cm)
	宗像大社 (22.0cm)
	個人 (22.0cm)
	② 遼寧省博物館 (21.3cm)
	白鶴美術館 (21.2cm)
	フリーア美術館 (21.0cm)
	③ 故宮博物館 (21.0cm)
	大伴公馬氏 (21.0cm)
	④ 藤井有鄰館 (21.5cm)
	近つ飛鳥博物館 (21.2cm)
	洛陽花子岩出土 (20.8cm)
	湖南省出土（要園壺） (20.2cm)
	⑤ 上海博物館 (20.0cm)
	久保惣記念美術館 (19.9cm)
	洛陽出土 (19.1cm)

博物館コレクションにみる北野恒富旧蔵資料

明 尾 圭 造

最近、思わぬ発見があり楽しい調査をさせてもらった。というのは、関西大学博物館の実習教材のなかに卷子の一群がある。一群としか捉えなかったのは、ほとんどが複製であり、唯一の自筆作品である「酒吞童子絵巻」も粉本であるためだ。

ところが、館蔵品目録によれば「酒吞童子絵巻」は末永先生が寄贈されたもので、先生自ら手元資料とされたと考えられるものであった。昔、京都の老舗古書店で「末永先生にはよく寄っていただいたものです。学生の教材になるからと、よく古文書や資料をかうていただきました」と聞いたことを思い出した。

問題は、もう一方の複製卷子で、実は貴重な資料が含まれることが判明した。ほとんどが大正昭和にコロタイプ版で復刻された合戦絵巻が多いのだが、下図の「平治物語」を見て驚いた。箱蓋と卷子末（右上図）に朱文方印で「恒富」



図版2 「恒富」朱文長方印

の落款が確認出来たからだ。

「恒富」とは明治から昭和にかけて大阪を代表する美人画家として有名な北野恒富〔明治13年（1880）～昭和22年（1947）〕に他ならない。本資料の落款は恒富所蔵の蔵書印として押されたものと考えられるのだが、期待を胸に、他の10点ほどの複製卷子をじっくりと見返してみた。結局、もう一点「平治物語六波羅行幸巻」が確認できた。いずれも、大和絵同好会発行の複製卷子で前者が昭和4年、後者が大正11年発行とする奥付が読み取れた。

この大正11年から昭和4年前後の恒富の動向については昨年実施された『北野恒富展』図録（監修大阪近代美術館準備室橋爪節也）に詳しい。同書の年譜によれば、大正三年に結成された画塾、白耀社が隆盛を迎え、恒富自身も再興院展に出品を重ねるなど脂の乗り切った時期であることがわかる。そして、昭和5年には谷崎潤一郎の「乱菊物語」（大阪・東京朝日新聞社連載）に挿絵を描いて以降、『盲目物語』（中央公論社）、「蘆刈」（「改造」）、「春琴抄」（「中央公論」）と立て続けに谷崎文学に挿絵を描いている。



図版1 「平治物語」大和絵同好会昭和4年発行



図版3 『乱菊物語』表紙 創元社

なかでも問題とすべきは「乱菊物語」(上図)である。つまり、本作品が室町末期の乱世のなかで京都や播州室津を舞台としていたため、恒富は挿絵を描くにあたって、当時の時代考証の必要性が生じたのであろう。

それを裏付ける話とともに谷崎と恒富の関係について、北野以悦(恒富子息)による興味深い手記が残されている。

「当時谷崎潤一郎は関東大震災で関西に移って阪神沿線の海近い梅林で有名な岡本に居りましたが、其頃から父とは吉井勇先生等と時々一緒になる機会もあり、又奥様の松子夫人が父に絵を習っておられた関係上其後は一層近づきの度を増したようでした。

乱菊物語の挿絵を父が描くことになったのはこうした親交があった為父も快く引うけまして、随分気骨を入れて描いたようです。風俗考証などについても参考の古画や絵巻等を積んで夜遅くまで描いていました。」(註1)

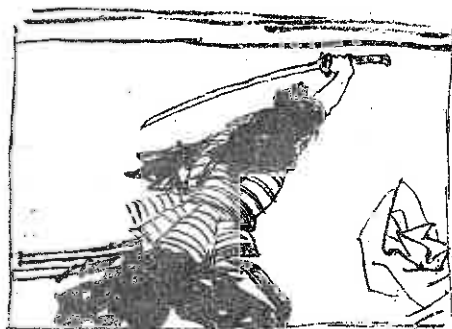
ここに見られるように谷崎と恒富の接点が松子夫人であったというのが興味深い。前述の白耀社は「雪月花星」と謳われた星加雪乃、別役月乃、橋本花乃、四夷星乃(前掲図録小川知子論考参照)など過半数が女性会員で占められており、松子夫人も華やかな雰囲気の中で習画

に親しめたと考えられるのである。

かくして、親交を持った谷崎の依頼で「乱菊物語」に取り組んだのであった。以悦が記すように挿絵の仕事では悪戦苦闘したらしい。時代考証のための絵巻や史書を側において呻吟する恒富が目につかぶようだ。通常作品制作とは異なり、谷崎文学の一端を担うわけであるから、その気苦労たるや如何ほどであったろう。

さて、ここで博物館蔵の「平治物語」は大正11年と昭和4年の復刻卷子であれば、昭和5年の「乱菊物語」連載時には手元にあったと考えてよいのではないか。もとより室町末期が舞台の「乱菊物語」に対して「平治物語」は鎌倉末期の軍記物語であり、いわゆる源平争乱の発端を伝えるものであるが、合戦場面や衣装風俗を考える資料としては問題がない。

また、前述の白耀社は実技のみならず、日本美術史講座を開催するなど研究所としての側面も持つ画塾であった(前掲図録小川知子論考参照)ため、塾生にとっても参考文献としての活用がなされていたと考えるのである。



図版4 『乱菊物語』挿絵から

「乱菊物語」は恒富没後の昭和24年、創元社から出版されるが、朝日新聞社には連載時の原画がなく、以悦述懐(註1)によれば、恒富の書庫で挿絵の原画と同様のものを六十枚程見つけたが、同場面の筆写が何枚もあり、如何に打込んで描いていたかが偲ばれる、と記している。いずれにせよ、谷崎と恒富を結ぶ資料が人知れず学生の実習に使われていたことに深い感慨を覚えたと共に、よく見ることの大切さを改めて痛感した次第である。

註1 北野以悦「乱菊物語の挿絵について」(「谷崎潤一郎全集第十八巻付録5」中央公論社 昭和三十三年)

門松の想い出

藤田 恒 春

わたしの田舎は、生まれたころは滋賀県栗太郡常盤村大字志那字垣根（現滋賀県草津市志那町〔明治以前は近江国栗太郡志那村〕）と言い湖辺の寒村であった。明治6（1873）年の村の概観はつぎのとおりである。反別29町1反3畝7歩、戸数82軒、人口384人（男190・女194人）であった。因みに村高は天保郷帳で234石777合の小村にすぎず、しかも湖辺ということもあり下田が多く生産力は高くはなかったようだ（『春日力氏所蔵文書』）。

もっとも、近世までは対岸坂本や大津への渡し場として知られ、古くは「源平盛衰記」に現れるなど中世の古記録類によく見られ、なかでも永禄11（1586）年9月24日、織田信長が足利義昭を奉じて上洛すべく東山道を守山から志那へ至り（この道は志那街道と呼ばれていた）大津へ渡海したことで知られている。また、蓮の名所として知られていたため中世では京都の公家や僧侶たちが見物にやってきたことが日記などに散見される。現在、サントリー美術館が所蔵する「近江名所図絵」に描かれている蓮と寺院（蓮海寺）は、志那村に該当すると推定されている。慶長8（1603）年6月25日、徳川家康も観蓮のためやってきている（『東京大学史料編纂所架蔵写真帳「時慶卿記」五』）。17世紀初期までは、蓮の名所であると同時によく利用された渡し場であった。「志那津浦」は「不死」に通じるとのことで家康が喜んだという伝承も残されている。

2

叙上のような歴史的地理的環境にあったためか村には古い習慣などが多く残されていたように思われるのである。そのひとつがわが家の「門松」である。

門松といっても玄関まえ（門口）に高さ1^間から1^間50^分足らずの松の枝を細い青竹を地中にたて、それに松の枝を荒縄で結わえつけるだけの至ってシンプルなものである。山はないの

で松や注連飾りの裏白などは、町で買い求めるようであった。親戚のものが山へ取りに行っていたこともあるようだ。

父は県庁に勤めていたので正月迎えの作業は当然のこととして御用納め後で、注連縄^{なまな}は、28か29日ごろの夜なべ仕事であったように思われる。注連縄は秋の取り入れで別にしていた稲藁を使って編んでいた。女の仕事ではなかった。

大晦日の午後3時ころから門松を立て始める。これは、村の産土神である志那神社（志那津彦命・志那津姫命・伊吹戸主命を祭神とする。風神で渡しの村に似合った祭神である）の神主さんが夕方、各戸をまわり神棚に新しいお札を置いていくためであったからではないかと思われる。立てたばかりの門口の門松のあいだを最初に村の神主さんが訪なのであった。ここから正月が始まるのであったろう。

門松は門口に2本、裏口（勝手口）に1本、小屋の出入口に1本宛、便所に1本、川門（湖辺の地域は多くの家で田船を持っていて、それを家の前の川に繋いでいた）に1本、井戸に1本立てていた。この本数は、川門と井戸を除けば節分の鬼の面刺しの数と同じであった。川門と井戸を除けばウチとソトを分かち空間に門松を立てたのである。門口とはいえ乾いた地面に青竹を打ち込むのは一寸した力仕事で、あらかじめ鉄の棒で穴を少しあけていた。そこに青竹を打ち込み、それに松を結わえるのだが、それを手伝うのが子供の役目であった。

これより前にカドを掃き、注連縄を飾り、そして日没頃には神棚にお燈明とお神酒を供え、大晦日の夕飯に先だって神棚に供えるのと同じように門松のてっぺんに炊き立てのご飯と根元に土器^{かわらけ}に元旦の雑煮のために用意した汁に大根・親頭（芋魁）^{おでがしら かしらいも}をサイコロ型に切ったものを二三ヶ入れて置いてまわるのがこれまた子供の役目であった。

門松のうえにご飯を一口ずつおいてまわるのが実に不思議であった。正直言って大晦日の夕

飯どき、寒いのにどうしてこんなことをするのかと、永らく疑問に思ったままであった。まして朝夕二度宛三カ日続けるのである。村のなかでこんなことを続けているのは数軒しかなかったように思われる。土器をおくことは70年代に、門松のうえにご飯を置くことは80年代後半に潰えてしまった。

わが家は本家の分家（インキョと呼ばれていた）であるが、本家とてせいぜい天保期ころまでしか遡ることはできず、村のなかでは小百姓であった。父は青年期、農家の二男坊であったことから1946(昭和21)年まで外地にいたのである。これらのしきたりを子供のときに植え付けられたのであろうか。子供心から見ても古くさいしきたりなどを墨守していたように思われた。本家だけがとくに古いしきたりなどにこだわっていたかは分らないが、こと門松については20世紀末期まで何ら疑問に思うことなく昔から言い伝を墨守してきたのである。そこには理屈ではない世界があるように思量される。門松にご飯を供えることの意味を知るに至ったのは、年齢40の後半になってからである。

3

永らく疑問には思っていたが忘れ去っていたわが家の門松について思い返すに至ったきっかけは、ある仕事で上杉本「洛中洛外図」を眺めていたときであった。「左隻第三扇4」(82・3頁)には、室町通りの正月風景が描かれている。そこには屋根に届くような大きな門松がたてられていることが分る。この場面には16本の門松が描がかれていて、うち2本は雲に隠れている。門松のうえを凝視するとそれぞれに白いものが載せられているように見える。しかも、左端の正月の祝福芸のひとつ春駒4人が通りかかろうとする町家の前の男の右手には箸が描かれ、箸には白いものが見える(『洛中洛外図大観 上杉本』小学館、1987年)。

快哉を叫ぶ、とはこのようなときを言うのであろう。他用で眺めていた洛中洛外図のなかに子供のころからの実体験が5百年ほどの時空を超えて直結したのである。これがご飯であることを直感的に確信したのである。同書の解説には正月飾りとして説明はあるが、門松のうえに何気なく描かれている白いものについて何ら触



れてはいない。恐らく解説者たちも気づかなかったのか関心がなかったからと思われる。

門松にご飯を載せる習俗は、湖辺の寒村の習俗だけではなくたのである。京都の習俗が伝わったものと見られるが、さて今度はこの意味についてどう考えるかについてはその後取り紛れお座なりとなったままであった^①。

ところが、今年になって別の仕事を企図したことからこの門松について再び考え直してみようと思いついたのである。民俗学の関係論文や辞典の類をにわか勉強してみたが、直接言及しているものは見当たらなかった。門松を立てるもとの意味に立ち戻って考えることが一番正論のように思われた。

門松について「本来は正月の歳神が祭場に降臨するための依代として設けられたもの」との指摘は、歳神（年神とも書くようだが、ここでは歳神とする）が年中の安全と豊作とを約束する神であることから建物のウチとソトを画する門口にそれを立てたことは至極当然の結果であった。この歳神は「家ごとに屋内に迎えて祭る」とあるが、わが家では歳神の話を聞いた記憶が全くない^②。

素人考えだが降臨したと思われる歳神を依代そのもので饗応したのではないだろうか。「屋内に迎え」との屋内は、必ずしも建物のなかであることを必要とせず、その家その家のカド（^{カド}屋敷内）でさえあれば事足りたのではないか。門は母屋の前の庭であり、福の神が来臨する祝祭的空間であったとの指摘は、母屋と前庭との境界に門松を立てたことの意味を考えていくうえで示唆的である（日本民俗文化大系12巻『現

代と民俗』小学館、1986年)。

母屋の前の門に依代である門松に供物としてのご飯を供えることによって歳神とともに年頭を祝ったのであろう。京都のような町家が向いあった大都市では、個々の門に歳神の降臨を頼むよりも町と町との通りに降臨を求めることにより町全体の祝福を求めることとなり得たのではないだろうか。したがって、門口に立てた門松のうえに供物としてのご飯を載せたのではないだろうか。

4

神棚には、産土神の志那神社と伊勢皇太神宮および今1 躰祀られていたようだが思い出されない。神棚の前には注連飾り（裏白と譲り葉がつけられる）が張られた。そしてそれぞれの祭神のまえに燈明台（3本立てられるもの）とお三寸がおかれた。

夕景、6時ころ、カドの掃除も室内の掃除もすべて終え、一年の垢をおとすとて風呂へ入り身を清め（気持ちだけであろうが）たのち、神棚の燈明台の蠟燭に火をともし柏手をうって新年を迎えたのであった。これは当然のことながら父の役割であった。皎々とゆれる燈明のあかりは家族全員が無病息災でなにごともなく過ごせたことと、来るべき新年の平安を求めるような心地にさせ、今にして思い返すと随分神々しい感じのする一年の節目の時間であったように思われるのである。

ながし（台所）にも小さな神棚があった。何を祀っていたのだろうか。大峰山が祀られていたような気もするが定かではない。籠を使っていたときには、その真ん中に愛宕さんの護符が貼られていた。今1 躰祀っていたはずだが失念してしまった。床の間には掛け軸（何であったかも失念）と三宝のうえに鏡餅をおき、その前に燈明台（3本立てられるもの）とお三寸を供える小さな銚子がおかれていた。

小さな家なのに随分たくさんの神さんを祀っていたものである。歳神が屋内に入れる余裕などなかったのではないだろうか。カドの門松で三カ日休み給うたのではないかと愚にもつかぬことを思い浮かべるのである。

5

1980年代なかばまで受け継いできたこの習俗は絶えてしまった。正月の習俗のなかで門松については段階的であれなくすことを勧めている研究者すらいる（櫻井徳太郎著作集9『民俗儀礼の研究』吉川弘文館、1987年）。しかし、これは余計なお世話というべきものである。各家で伝承してきたさまざまな習俗習慣の継承の是非は、当事者が決めることである。

いかに優れた習俗習慣であれ慣行であれ受け継ぐ人がなくなればそれが消滅の時期というものであろう。かたちだけを保存してもそこに住まいし受け継いできた人の心性が伴わなければそれは単に見せ物に過ぎないのである。まがいものは保存できてもホンモノはできないのである。

【註】

①門松を立てることについて「このこと田舎に始まりて、後に京師に移りしかば、後々までも、賤が門松と詠みたるなり」と、田舎で始められたことが都へもたらされたとする考え方もあったようである（喜田川守貞著、宇佐美英機校訂『近世風俗志（四）〔守貞謄稿〕』岩波書店、2001年）。なお、わが家では正月の門松や注連飾りなどは、4日の朝、父が片付け、15日の小正月に焼いていた。

②『国史大辞典』10、吉川弘文館、1989年。柳田國男も門松に対するこの作法（習俗）についてはまったく言及していないことが却って興味をそえられる（『柳田國男全集』16、筑摩書房、1990年）。

（付記）ささやかな思い出の記を執筆する機会を与えられた森隆男先生に深謝申し上げます。

人間国宝北村昭斎先生と学生との対話

高 橋 隆 博

今年の5月26日、永いおつきあいをさせていただいている北村昭斎先生が、わざわざ時間を割いてご来館いただき、あわせて法人の代表者を表敬訪問された。かねてから念願していたことであった。

北村先生は、平成11年、「螺鈿技術」によって国から重要無形文化財保持者（いわゆる人間国宝）に認定されたわが国漆芸界の屈指の作家であり、至宝である。これよりさき、先生は創作活動のかたわら、正倉院宝物中の漆工品や国指定の文化財、つまり国宝や重要文化財に指定されている漆芸品の修復・復元を永年にわたり手がけられ、そのすぐれた技量と功績によって選定保存技術保持者に認定されている。ご尊父の大通先生も同じ認定をうけており、父子二代にわたっての認定は稀有なことである。

螺鈿とは、夜光貝とか鮑貝、蝶貝などの貝を文様の形にきりすかし、それを器物に装着して装飾する技法のことで、この装飾法の歴史は、はるか中国・東周時代にさかのぼり、唐時代には代表的な漆芸技法であった。螺鈿鏡や螺鈿紫

檀五弦琵琶などをあげるまでもなく、日本の螺鈿技法の源流は正倉院宝物に求められ、その後も、わが国のほこるべき漆芸技法として展開してきた。

もう20数年ほど前のも前のことだが、北村先生に「博物館実習用に、作品をつくってくださいませんか」と、大変に失礼なお願いをしたところ、「学生さんのためならば」と、はるか材料費にもおよばない薄謝で応じていただいたのが『螺鈿蒔絵宝相華文合子』である（図1）。人間国宝の作品をつかつての授業など、まことに贅沢きわまりないことで、おそらく他の大学などではありえないことだろう。もとより、大学にとってもかけがえのない文化遺産であるから、学生諸君には「見せる」にとどめてる。

本年は、博物館開設10周年を迎え、あわせて関西大学創立120周年の記念事業の一環として「名品展」を開催し、そこに先生の作品を展観できたことは大きな喜びであった。この機に、またも先生に「学生にお話をしていただけませんか」とお願いしたところ、「お役にたつなら、



図1 螺鈿蒔絵宝相華文合子（北村昭斎作）

かまいませんよ」とご快諾いただき、ご来館となったのである。私たちは、博物館や美術館、あるいは百貨店などで芸術作品にふれる機会を多くもっているが、作家に会うことなど、もっといえば作家の息づかいまでも感じる事など、そうありはしない。先生のご来館を「かねてから念願していたこと」といったのは、まさにこの一点においてである。

その日は、数10名の学生を前に、はじめは私との対談形式にはじまり、先生の学生時代（東京芸術大学）のこと、芸術と創作活動のこと、文様と技法のこと、そして文化財の保護と修復の話へとおよび、さらには先生と学生とが作品をとり囲む形で楽しい対話へと移っていった。3時間をこえてのやりとりは、学生諸君にとっては思いがけない、しかも貴重な経験となったようで、それだけにひととき充実したひと時となった。

「口をもたない作品」とは、よく言い慣らされてきた言葉で、作品自身は見るとは何も語ってはくれない。ただそこに「在る」だけにすぎない。作品に口を開かせて、「何か」を語らせるのは、作品を目の前にする鑑賞者である。北村先生は学生の研究意欲をかきたたせるためにも、この作品にさまざまな技法を凝らされたのである。

合子の木地（ボディー）は、桧を薄く細くつくった材をグルグルと巻いた構造であり、これ



は、昭和48年のX線透過写真撮影によって、正倉院宝物の漆胡瓶やいくつかの銀平脱合子などに確認された特殊な技法であって、その後、同じ技法の漆工品が統一新羅時代の半月城離宮池の雁鴨池からも出土し、さらには中国・唐代の漆工品にも確認されている。蓋表では、中央の六弁花をタイマイ（海亀の甲羅）であらわし、その中心に金の薄板（平脱技法）を置き、さらにその周囲を夜光貝による螺鈿でくくっている。その周りには螺鈿とタイマイ、金蒔絵によって宝相花文をあらわしている。宝相花は想像上の花で、奈良・平安時代にかけて大いに採用された仏教を荘厳する花文様であった。

北村先生は学生との対話のなかで、作品にあらわした技法と意匠の特徴と歴史性について説明され、あわせて作品解釈の糸口をわかりやすく解説されたのであった。学生が「もの学」の真髄にふれたことはいうまでもなく、感激一入の態であった。北村先生に感謝するほかはない。

大学の教育と研究は、文献を中心にしている。というより、むしろ「文献学」に傾いているといってよい。私たちは、もっと「もの学」の重要性を認識すべきであろう。そして、博物館こそは、「もの学」の中核をなしているのである。



作品について解説する北村先生

平成15年度購入資料の紹介—中国陶磁器—

高橋 隆博

収蔵品は、博物館の「顔」であるが、「顔づくり」は一朝一夕になるものではない。当館は、数多くの考古資料を所蔵しているのだから、考古学系博物館とみられているのだが、じつは美術工芸品や民俗資料をも収蔵している。その中には、中国陶磁器も含まれているのだが、ごくわずかを数えるにすぎない。これらを充実し、中国陶磁器を系統的に整備し、展覧に供するために、平成13年度から、中国陶磁器の収集をはかってきた。こうした経緯から、本年度も中国陶磁器を3点購入した。これであわせて12点を数えることとなり、時代的には、漢代から明代までのものが一応は揃ったことになるのだが、もとよりようやく緒についたばかりといってよい。

本年は開設10周年の節目を迎え、記念展として収蔵資料から優品を選りすぐり、4月に「名品展」を開催し、これまで収集してきたすべての中国陶磁器を展観することができたのである。なお、この博物館10周年記念展は、平成18年度に迎える関西大学創立120周年記念事業の一環として企画したものであった。

1、三彩刻花芍薬文双耳壺（遼時代、10～11世紀。高11.2センチ、胴径15.6センチ）

線彫りして文様の芍薬文をあらわした三彩の双耳壺で、遼三彩にしばしばみられる技法と器



三彩刻花芍薬文双耳壺（遼）

形である。簡略化された大雑把な芍薬文の線描といい、緑と黄のたがいに流れこむ釉薬といい、遼三彩（遼代の三彩釉の総称）に特有の素朴な作風を示している。芍薬の花を白、葉を緑、地を黄釉としているが、緑釉が流れだし技法の稚拙さがみられるが、逆にそれが一つの景色をなしている。この作例とほとんど似通っているものが、中国・遼寧省博物館に所蔵されている。

遼三彩が研究者の耳目にふれたのは、そう古いことではない。1933年、瀋陽に博物館建設の構想がもちあがり、そこに張作霖など旧軍閥が所有していた文物の一部を陳列することになった。その中に素朴な三彩陶器が含まれていたが、それは唐三彩ともちがっていた。そこで、唐末から五代にかけて、契丹族が遼王朝を興したことをふまえて、これを遼三彩と名づけたのであった。なお、遼は東モンゴル地域で遊牧していた契丹族の建てた王朝（916～1125）で、まず東方の渤海国を征服し、ついで河北省と山西省の北部、さらには西域にまでその勢力はおよんだ。

2、白掻き落し牡丹文陶枕（宋時代、12～13世紀。高9.5センチ、長17.5センチ、幅20.0センチ）

白掻き落しの技法による、いわゆる磁州窯系の陶枕で、植生する一本の樹に二つの牡丹花文



白掻き落し牡丹文陶枕（宋）

をあらわしている。これは、白化粧をほどこしたのち、文様の輪郭を線彫りし、それ以外のところの白化粧を浅く平らにしていねいに掻き落して素地をあらわし、その上で透明釉をかけて焼きあげる技法である。この作例では、それほど顕著ではないが、鉄分を多く含む素地の場合、いささか紫色をした暗灰色となり、白化粧とのコントラストが際立ち、それが掻き落とし技法の大きな魅力となっている。

白化粧とは、純白のきめの細かい土を水で溶いたもの（スリップ）を素地にかけて白地をつくる技法のことをいい、これを化粧掛けともいう。白化粧につかう白土は、磁州窯系の窯では、鉄分のきわめて少ないカオリン質の岩石をこまかく砕いて、これを化粧掛けに用いた。そのため、磁州窯系の作例は、柔らかい質感をもつものが多くみられる。カオリンは高火度でも溶けにくい性質をもっており、釉薬が溶けても白土は粉のような状態で素地をおおうことになる。

磁州窯とは、中国北部の各地の窯で焼かれた、白化粧の陶器の総称であり、せまい意味では、河北省磁県で焼かれた陶器のことをいう。なお、陶枕は、すでに唐代に三彩の陶枕が作られ、使用されていた。

3、五彩羅漢図皿（明、17世紀前期。径21.8センチ）

雲にのる羅漢像を、五彩といって、濃い青花に赤、黄、緑で上絵つけしたのちに焼き上げた、典型的な天啓赤絵の作例である。

天啓赤絵とは、明末の天啓～崇禎年間（1621～44）に景德鎮の民窯で焼かれた、いわば粗製の色絵磁器のことで、この時期、国力の衰えとともに景德鎮への国の保護と統制がなくなり、まるで枷から解き放たれたように、陶工たちは自由奔放で飄逸な意匠を生み出していった。そこに天啓赤絵の大きな魅力がある。

中国陶磁器の赤絵といえ、なんといっても成化年間の豆彩、そして嘉靖年間の金襴手赤絵に指を屈するが、こののちの万暦年間における赤絵の濫造、そして景德鎮の官窯からの脱落などがあって、これまでのいわば正統的な赤絵は姿を消していった。しかし、民窯となった景德鎮窯は、染付を基調としながらも、当時の風潮に敏感に反応した意匠、たとえば文人画・山水画などを取り入れていったのである。これは、それまでの万暦赤絵にない大きな特徴となっている。



五彩羅漢図皿（明）

今年も好評でした！「なんでも相談会」

関西大学博物館「なんでも相談会」を、8月6日（金）、7日（土）の2日間開催いたしました。

「なんでも相談会」は、地域に開かれた大学として重要な窓口でもある博物館が、地域住民の方々にもっと気軽に大学博物館を活用していただくための取り組みとして、平成15年度から始めたものです。

小中学生の夏休みの自由研究に対応できるよう、日程を夏休み期間に設け、本学教員をはじめ、大学院生、学部学生、そして本学教員では補えない分野を専門の学芸員の先生に応援願って、ありとあらゆる分野の相談に対応させていただきました。昨年度に引き続き、今年度も大変好評をいただきました。

小学生のお子さんが夏休みに飼育する亀の世話の仕方を相談にきたり、地域の方や、わざわざ遠方からお見えになった方が、ご家庭でお持ちの「お宝」について由来などを尋ねたりと、20件あまりの相談がありました。

スタッフとご来場いただいたお客様とが和やかに、持ち込まれたお宝についての話を交わし、和気あいあいとした雰囲気の中で2日間を終えることができました。また、ご来場の児童・学生さんを対象に、自然系の学芸員の先生が、身近な葉っぱを使って昆虫を作る体験教室を即席に開催し、お子さま方にも喜んでいただけたようです。

博物館の恒例行事として、地域の皆様に親しんでもらえるよう、次年度以降も努力していきたいと思います。



博物館だより

◇関西大学博物館開設10周年記念行事について

■ 関西大学博物館開設10周年記念企画展「関西大学博物館の名品」の開催

4月5日（月）～5月15日（土）の期間、「関西大学博物館の名品」展を開催しました。関西大学博物館所蔵の重要文化財に加え、これまでに寄贈・購入等で収集した資料の中から選りすぐった優品を一挙に公開し、4月4日（日）、5月16日（日）の特別開館日を合わせて2,247名の入館がありました。

■ 開設10周年記念講演会の開催

5月8日（土）、本館の初代館長の関西大学名誉教授、網干善教氏より、関西大学博物館の考古学資料についてのご講演をいただき、100名余の聴講者を迎えて盛況に行なうことができました。

◇関西大学経済学部・商学部創設100年記念展示「大阪の商家と引札」の開催について

期間：平成16年10月12日（火）～23日（土）会期中無休

開館時間：10時～16時 入館無料

◇関西大学博物館開設10周年記念 平成16年度考古学入門講座の開催について

「関西大学と考古学の半世紀」

10月30日（土）末永雅雄先生と関西大学の考古学

初代館長 網干善教（関西大学名誉教授・関西大学飛鳥文化研究所所長）

11月6日（土）紀の国発掘一岩橋千塚・楠見・橘谷、そして宝光寺―

第2代館長 藺田香融（関西大学名誉教授）

11月13日（土）民俗学と考古学のあいだ

第3代館長 上井久義（関西大学名誉教授）

11月20日（土）博物館の名品

第4代館長（現職）高橋隆博（関西大学文学部教授）

会場：関西大学天六キャンパス 時間：13:30～15:30

お問い合わせは関西大学事務局事業課まで（電話：06-6368-0297）



展示解説する高橋隆博館長



考古学資料について講演する
網干善教初代館長

編集後記

関西大学博物館は、平成16年4月で10周年を迎えました。

関西大学は平成18年に創立120周年を迎えますが、それまでの期間、創立120周年記念に関連した行事が目白押しです。本館の開設10周年記念行事もその一つで、春に記念展示と記念講演会を開催し、好評のうちに終えることができました。関西大学博物館が10周年を無事迎えることができたのは、ひとえに皆様方のご支援のたまものです。今後とも引き続き、ご指導・ご鞭撻賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

この秋には、やはり本学120周年記念行事のひとつである、経済学部・商学部創設100年記念行事に協賛した特別展示を開催いたします。この展示から、経済学部・商学部創設

当時の大阪の商家や経済がどのような状態であったのか、感じ取って頂けると幸いです。なお、この展示会の開催にあたりまして、羽間平安理事長の全面的なご協力をいただき、沢山の展示資料をご寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。

毎年恒例の考古学入門講座は、今年度は博物館開設10周年記念として、本館の歴代館長に、関西大学博物館と考古学に関わりのある講演をしていただきます。研究者としても立派な業績を積んでこられた先生方の講演に、どうぞご期待ください。

表紙は、明代後期に作成された五彩で、五彩花鳥「魁」字文鉢です。五彩は日本で呉須赤絵（ごすしあひ）といい、この作例のように見込みに「魁」の文字があるものを特に魁手（こゑて）とよんでいます。